HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市空間を読解するという楽しみ ： 麗江の山と水と神について
Author(s)	山村, 高淑
Citation	まほら, 39, 14-15
Issue Date	2004-04-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34867
Type	journal article
File Information	yamamura14.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

山村高淑（2004）「都市空間を読解するという楽しみ～麗江の山と水と神について～」
『まほら』39 号，旅の文化研究所，pp. 14-15

都市空間を読解するという楽しみ

～麗江の山と水と神について～

山村高淑

普通、地図は街路網を示す。だから麗江旧市街地で地図を見ながら歩くと間違いなく迷う。そもそも街路網が都市構造を規定していないからだ。では何が麗江の空間構造を決定しているのか。それは山と水である。

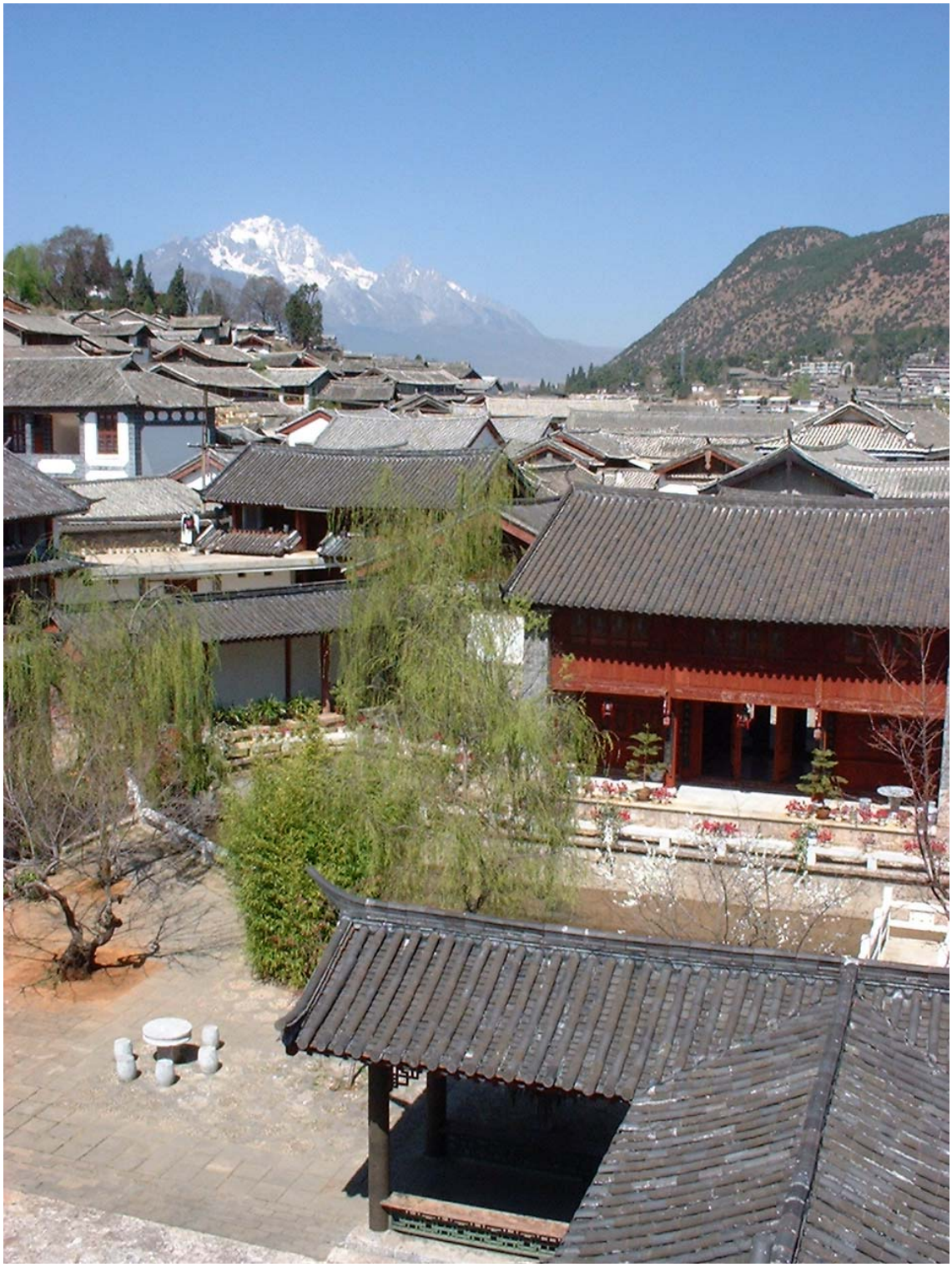
■水の流れ

いやはや、麗江旧市街地は全く迷路である。私は何日も何日も役に立たない地図を片手に道に迷い、途方にくれていた。そんな時、ナシ族のご婦人が教えてくれた。「迷ったら山を見て、そして水に逆らって歩きなさい」。山とは玉龍雪山のこと。麗江ナシ族にとっての聖山である。水とは旧市街地をくまなく潤す水路網のことだ。早速地図を放り出して玉龍雪山を探す。旧市街地から北へ約 13km のところに位置する標高 5,596m の玉龍雪山は、旧市街地の至る所から眺望できる。すなわちこの方角が北。そして傍らの水路の流れに逆らって歩いてみる。するとどうだ。果たして旧市街地の一番北側にある玉龍橋に辿りついたではないか。旧市街地のどこから試しても結果は同じだった。なるほど水路網の基点が玉龍橋で、ここから網の目のように水路が分流しているのだ。これはなかなかに面白い体験であった。

さて、この水路を流れる水は玉龍雪山の伏流水である。玉龍雪山から流れる地下水脈は旧市街地の北 1km ほどのところに位置する象山の麓で湧出し､黒龍潭という池を形成する。ナシ族は 800 年前からこの水を旧市街地に引き入れ、地形を巧みに利用し、標高のやや低い東南方向へ流れるよう上水道網を構築してきた。さらに驚くべきことに、市街地の東南部には農地が広がっている。旧市街地を潤した水は、その後農業用水としても有効利用されているのだ。もちろんこうした水道網は現役である。

考えてみれば「都市は街路網で把握する」という考え方は、極めて近代都市計画的な発想である。いつの間にか我々はそういう思考回路になってしまった。江戸や大阪だって昔は地形を巧みに利用し、水路を基本として都市空間構造が成り立っていたはずだ。

それからというもの私は麗江で地図を使わなくなった。



麗江旧市街地と玉龍雪山。向かって右手前の山が象山。中央奥にそびえるのが玉龍雪山。
（筆者撮影。2003 年 3 月）

麗江旧市街地の水路網。現在も飲用・生活用水として使用されている。（筆者撮影。2003 年 3 月）

■見えない都市の中軸線

中国の他の歴史都市を旅してみると、麗江の特異性が良くわかる。まずもって都市に城壁と中軸線が無いのだ。一般に中国の歴史都市は周の時代の古くから、中軸線による空間の対象配置、城壁の存在による閉鎖性、中心部（主として宮城）に向かう強い求心性、などといった空間理念によって建設されてきた。ところが麗江にはこうした特長が見られない。事の真相は定かでないが、元から清初までの 341 年間、麗江を収めたナシ族首長の木一族が、「木」と言う字を「口」（すなわち城壁）で囲んだら「困」の字になって不吉である、としてついぞ城壁を建設しなかったそうな。

ともあれ、麗江には城壁と中軸線が無い。しかしながら実際に生活をしてみると、目に見えないある種の領域性（内と外）と象徴的な空間軸とが存在することに気付く。日常生活空間としての旧市街地と、精神的な意味合いが非常に強い、旧市街地の周りに広がる自然環境とが、住民には明確に区別されているようなのだ。ナシ族固有の宗教は、自然崇拝を中心とする「東巴（トンバ）教」であるが、この宗教は市街地空間内に、固定化された礼拝場所としての寺廟を持たない。逆に、旧市街地周辺に存在する様々な自然環境要素が聖なるものとされ、信仰の対象として保護されてきた。中でも最も重要な場所が玉龍雪山である。

さらに面白いのは、旧市街地において歴史的に重要な 3 つの場所、すなわち、木府 （政治の中心）・四方街（交易広場。商業の中心）・玉龍橋（上水道の分基点）が南北ほぼ一直線上に位置していることである。そして、この南北のラインを北へ一直線に伸ばしていくと…なんと黒龍潭を経て水源地である玉龍雪山へと繋がるのである。つまりこれは聖山から政治の中心に至る水の流れと一致するのだ。こうした構造によって、麗江では漢族の歴史都市のように街路などの物理的な中軸線による空間の強力な対象配置という手法を用いなくても、異なる領域や場所が象徴的な点によって線状に結び付き、都市空間にある種の求心力が与えられているのだ。これを仮に「聖軸」と呼ぶことにしよう。

■都市美と神について

ことほど左様に麗江は山と水が視覚的にも精神的にも結びついた美しい街である。

仕事柄、いつも旅をしながら「美しい都市」とは何だろう、と考えていたのだが、麗江を旅して私はひとつのヒントを得たような気がする。それは、「美しい街」には必ず「住民の精神的な拠り所」が存在するということだ。その存在こそが、都市空間にある種の「聖軸」をつくり出し、視覚的にも精神的にも人を惹きつける「眺め」を生む。「神」の存在を確認するための仕掛けと言っても良いかも知れない。さて、800 年前の麗江の都市設計者はこの私の推理をどう思っているだろう？

そんなことを考えていたら、ふと以前、日本でナシ族のご婦人と一緒に旅をしたときのことを思い出した。とある地方都市で郊外の神社を案内したのだが、神域に足を踏み入れた途端、彼女は歩みを止め、「麗江の山と同じだ。ここには霊気がある。美しい。」と言ったのだ。これには正直驚いた。

考えてみればこの神社の神域も玉龍雪山も、集落の重要な水源地であった。「雲南と日本は照葉樹林文化圏」という学説の是非はさておき、確かにその時、初来日の彼女は麗江の「神」と同じ存在を感じたのである。

ますますもって旅は面白いと思う。

（やまむら・たかよし）